

空間操作による動画切り替えシステムを導入した演劇の有効性に関する考察

長崎県立大学 シーボルト校 情報メディア学科 浅野芽依

1. まえがき

近年、音楽ライブにおいて情報技術を使用した演出が増加しているが、それに対して演劇と情報技術のコラボレーションは比較的少ない。演出家や劇作家によって日々新たな演劇が生まれている現代、より新しい演劇を生み出すためには演出の幅を広げる必要がある。情報技術を演劇でも演出の一部として活用可能となれば演出の幅も広がり、演劇作品としてより良いものが作れるのではないかと考えた。そこで本研究では、演劇の新たな演出方法として有効な空間操作によって動画の切り替えが可能なシステムを提案する。

2. 演劇

演劇とは、俳優が脚本に従い、言葉と身振り手振りによってある思想や感情を表現し伝えようとする一連の行為のことであり、舞台装置・照明・音楽など視覚・聴覚上の効果を伴う総合芸術である[1]。

演劇の種類はきわめて多種多様で、新しい演劇を求める演出家や劇作家によって演劇の種類は増え続けている。

3. 先行研究

劇中に情報技術を導入した演劇の研究として、藤田ら[14]は能演劇「蜘蛛の糸」においてモーションキャプチャシステムで取得した人体動作とCG映像を、演出として活用することを提案し、観客によるアンケート結果より、舞台パフォーマンスにおけるCG映像の活用は効果的であることが確認されている。

4. システム概要

本システムを導入した演劇を行うにあたって、必要となる動きをビデオ撮影し、8種類の動画（登場、待機、挨拶、汚れ確認、人探し、驚き、

窓拭き、別れの挨拶）を作成した。

本システムの配置（平面図）を図1に示す。劇中に使用するために事前に作成した動画をシステムに取り込み、動画を切り替えるポイントを設定する。その動画をプロジェクターでスクリーンに投影し、空間操作によって動画が切り替わる。本研究における空間操作とは、WEBカメラを用いて人間の動きを読み取り、システム本体に触れることなく、人間の動きによって操作することを示す。これは時間で計ることのできない演劇において有効であり、また、役者と動画のコラボレーションであるため、使用する動画次第では、その動画自体が役者として機能する。これにより演出の幅を広げることが可能になると考えた。本システムを導入した演劇を演じている様子を図2に示す。同図の左側が動画の人物で右側が役者である。

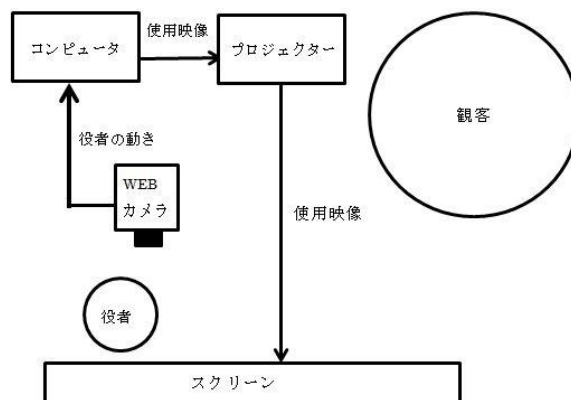


図1 システムの配置（平面図）。

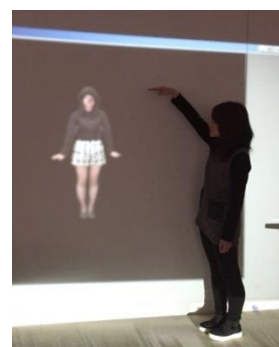


図2 演じている様子。

5. アンケート調査

システムを導入した演劇の有効性を調べるために、演劇未経験者から演劇経験6年までの男女11名に本システムを導入した演劇を実際に観てもらい、アンケート調査を行った。

アンケート項目は①「このシステムを導入した演劇は面白いと思ったか」、②「このような演劇をまた観たいと思ったか」、③「このシステムは演劇において有効活用できると思うか」、④「もしあなたが演劇をするとしたら、このシステムを導入したいと思うか」とし、その他にも、自由に意見を記述する欄を設けた。

6. アンケート結果と考察

アンケート結果の考察を行うに当たり、「とても思う」を4点、「思う」を3点、「思わない」を2点、「全く思わない」を1点、というようにそれぞれを点数化した。項目ごとの平均点を平均評価点とし、それをグラフ化したものを図3に示す。同図より、全体的に平均評価点が高いことが分かる。問い①、②に対して、回答者全員が「とても思う」、「思う」という肯定的な答えを示しており、この結果から、本システムは演劇の新たな演出方法として有効であるといえる。

アンケートの意見には「新しい」、「今までの演劇とは違う」などの言葉が数多く見られた。日々、新たな演劇が生まれている現代においても、本システムを導入した演劇は今までにない新しい演劇として認識されていることが分かる。また、演劇経験者からは「役者の動きをきっかけに動画が切り替わるため、タイミングの調節をする必要がなく、とても便利」という意見があった。演劇は音響や照明などの演出を切り替える際、稽古の段階で役者と裏方とのタイミングを細かく調節する必要がある。しかし役者の動きによって動画が切り替わる本システムを使用することによって、稽古段階でのひと手間を省くことができるということも確認された。

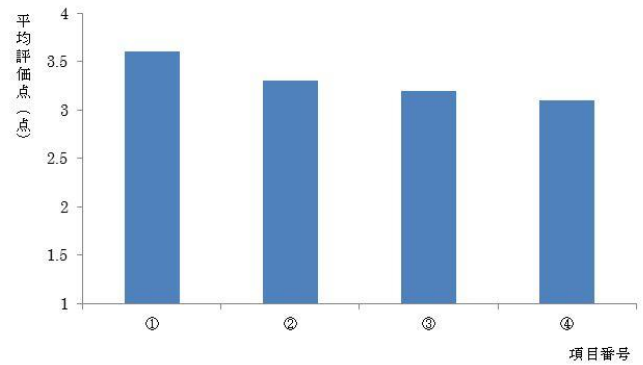


図3 アンケート結果.

7. あとがき

本研究では、空間操作によって動画の切り替えが可能なシステムを提案し、そのシステムを導入した演劇の有効性についてアンケート調査を行った。その結果、システムを導入した演劇の有効性が確認された。さらにアンケートの意見により、演劇の演出の幅を広げるという点や裏方とのタイミングを調節する必要がなくなり、稽古段階でのひと手間を省くという点でも本システムを導入した演劇は非常に有効であることが確認された。

しかしアンケートには、「音声も加えてほしい」という意見がいくつかあった。動画と同時に音声も再生することが可能になれば、動画自体がより役者としての役割を果たすことができ、今よりさらに演出の幅を広げることができるため、本システムを動画と同時に音声も再生可能となるよう改良すること、そしてその有効性の検証は今後の課題としたい。

参考文献

[1]河竹登志夫, 演劇概論, 東大出版, pp.4-6, 1978.

[2]藤田健太郎, 曾我麻佐子, 能演劇「蜘蛛の糸」におけるモーションデータとCG映像の活用, 一般社団法人映像情報メディア学会 映像情報メディア学会技術報告 35(14), pp.17-20, 2011.